

た小泉屋敷〔今の東文化の地〕にもいた。佐々も川内の上屋敷から下屋敷に移った。古城が西南戦争後の刑務所にされることになると屋敷を伊達氏に提供して笹新田に引っこみ、不動堂後藤、宮床伊達も藩主のために屋敷を提供して旧領に引きあげた。』とある通りであります。

注(1) 鐘は集める、景は景色。

注(2) P. 174 の注(4)、P. 465 の注(6)参照。

注(3) 孟は初めのこと。孟春は旧暦1月。

注(4) 望月。満月のことから、旧暦15日をいう。

注(5) 左近衛中将。正徳元年〔1711〕任ぜられた。

注(6) 本姓の藤原。藤原吉村を3字に修して「藤吉村」としたものの。

注(7) P. 12 の注(2)参照。

注(8) P. 538 の注(3)参照。

注(9) P. 97 の注(7)参照。

注(10) P. 115 の注(2)参照。

注(11) P. 537 の「184.「養種園」の名称」参照。

注(12) P. 170 の注(2)参照。

資料 伊達家史叢談 14 (伊達邦宗)

仙台市政だより 1236号

グラフせんだいNo.36

91. 白河以北一山百文

問 「奥州白石ばなし」(藤井武夫著)に、盛岡出身の平民宰相原敬⁽¹⁾の雅号「一山」は、戊辰戦争で勝ち誇った薩長人⁽²⁾が、敗残の東北人を嘲笑した慣用語「一山百文」からとったもので、これは、明治10年、雑誌「近事評論」に熊本県人林正明が執筆した「白河以北一山百文」の表題の下の句であると記されています。この「白河以北一山百文」の全文を読みたいのですが。

答 「近事評論」⁽³⁾は、明治9年6月3日の創刊で、進歩的な政論雑誌として高い声価を得、多数の購読者を集め、明治16年5月まで刊行が続けられたものです。この「近事評論」の現存しているのは、東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵のものだけとなっています。このうちの第1-3号だけは「明治文化全集」第5巻雑誌篇(明治文化研究会編、昭和3年発行)に収録されています。

この「近事評論」第148号(明治11年)に、漂風子の執筆になる、薩長政府に対する諷刺〔ふう

し)をこめた「白河以北一山百文」の記事が、次の通り掲載されてあります。

『市ニ泣ク者アリ。衆環集ス。漂風子偶々散歩ス。即チ往キ之ヲ見ル。

一人アリ。坐シテ地図ヲ開キ、数箇ノ土偶ヲ陳〔つら〕ネ、鞭ヲ執テ之ニ臨ミ、大ニ泣テ曰ク「白河以北一山百文」ト。辞氣悽壯、衆相顧ミテ黙ス。

漂風子前〔すす〕ンデ之ニ問フテ曰ク「汝何為者〔なににするもの〕ゾ、泣キヲ売ル者乎〔か〕。白河以北ノ泣キ既ニ一山百文ト云フ。箱根以南ノ泣キ其価幾何〔いくばく〕ゾ。今泣ク所ノ泣キ即チ一山百文ノ泣キ乎。方今天下疲弊上下困耗ス。然ルニ図ヲザリキ、百文ノ錢ヲ散ジテ汝ガ泣キヲ買フ者アラントハ。而シテ其ノ之ヲ買フ者一日能ク幾人カアル」。

泣者曰ク「我レ泣キヲ売ル者ニハ非ザルナリ」。曰ク「然ラバ則チ汝ガ売ラント欲スル所ノ者何ゾヤ」。曰ク「偶人ナリ」。漂風子又曰ク「汝偶人ヲ売ル。価如〔も〕シ当ラザレバ之ヲ売ラズシテ可ナリ。利ヲ欠キテ之ヲ売り、空シク号泣スルモ亦タ何ノ益スル所カアラン」。

泣者曰ク「我ガ泣ク所以〔ゆえん〕ノモノハ敢テ我ガ利ノ為メニハアラス。唯ダ偶人ノ為メナリ」。漂風子曰ク「汝爾〔なんじみずから〕ノ為メニ泣カズ却テ偶人ノ為メニ泣ク其ノ説聞クヲ得ベキカ」。泣者喜ンデ曰ク「我ガ業ヲ開キシヨリ茲ニ数年、未ダ問フテ此ニ及ブモノナシ。今幸ニ子ガ高問ニ会フ。我レ何ゾ語〔つ〕ゲザラン乎〔や〕」。

乃チ其ノ執ル所ノ鞭ヲ揮テ地図ヲ指示シテ曰ク。

「此レハ是レ九州、此レハ是レ四国、是レヲ中国トナシ、是レヲ上国トナシ、次ヲ関東ト云ヒ、次ヲ東奥ト云フ。而シテ我レ其ノ各地ノ風俗ヲ模擬〔もぎ〕シテ偶人ヲ造リ、図上ニ配布シ、以テ之ヲ売ルニ、上国以西買者甚ダ多シ。其ノ薩長肥土ニ至テハ人其ノ精粗ヲ問ハズ購フテ以テ帰ル。而シテ関東以北ハ殆ド買フ者ナシ。其ノ東奥地方ニ至テハ又タ敢テ顧〔かえりみ〕ルモノナシ。

我レ試ニ窃〔ひそ〕カニ西南地方ノ偶像ヲ取テ之ヲ東北ニ移シ、東北ノモノヲ以テ之ヲ西南ニ転ジ、以テ買者ヲ待ツ。買者猶ホ西南ノ地ニ就テ之ヲ購求スルコト、敢テ前日ニ異ナルコトナシ。是ニ於テ我レ又大声呼ンデ曰ク。“白河以北一山百文”ト。買者皆ナ笑ッテ曰ク。“何ゾ東北ノ醜粗〔しゅうそ〕ナル”ト。而シテ自ラ既ニ其ノ誹〔そし〕ル所ノ者ヲ求メテ抱テ之ヲ懷裡〔かいり〕ニ置クヲ知ラズ、直チニ奔〔はし〕ッテ家ニ帰り、父母ニ示シテ曰ク“是レ西国ノ俗ナリ。勇武ナル其ノ貌〔かたち〕智略果シテ思フベシ”ト。其ノ父之ヲ見テ即チ亦タ賞賛ス。一家風〔ふう〕ヲナシ又タ来リテ之ヲ求ム。我レ亦タ交ユルニ各方ノ者ヲ以テシ、遂ニ一定ノ規ナシ。然レドモ人只ダ其ノ西南地方ニ置クモノヲ求メテ、東北地方ニ在ルモノヲ喜バズ。我レ是ノ故ニ、東北地方ノ已ニ天下ニ厭棄〔げんき〕セラルルノ久シキヲ知り、偶人ノ為メニ悲シムノミ」。

漂風子曰ク「泣ノ説我之ヲ聞ケリ。而カモ足下ハ、唯ダ其ノ悲シムベキノ泣キヲ知テ、喜ブベキノ泣キヲ知ラザルモノナリ」。

曰ク「何ヲカ喜ブベキノ泣キト云フ」。

曰ク「治乱盛衰ハ天ノ道ナリ。道上レバ必ズ下ラザルヲ得ズ。諺ニ曰ハズヤ、楽アレバ苦アリト。

然ラバ則チ楽ハ苦ノ種子ニシテ、治ヲ見テ乱ヲ知り、盛ヲ見テ衰ヲ察スレバ、其ノ悲シムベキ所以ノ者、却テ悲ム可カラザル所ニ在リ。之ヲ喜ブ可キノ泣キト云フ。

西南地方ノ偶像類〔しき〕リニ世変ニ合ヒ、遂ニ人心ノ嗜好ニ適シ、時勢ノ途ニ翱翔〔こうしょう〕⁽⁸⁾スルコトヲ得ルモ、是レ猶ホ俳優家ガ流行ノ事ヲ演ジテ女子ノ心ヲ収攬〔しゅうらん〕スルモノト相異ナルナシ。事古ク技〔わざ〕陳〔ちん〕スルニ及ンデハ、復〔ま〕タ敢テ之ヲ顧ルモノナシ。世人ノ情態渾〔すべ〕テ此ノ如シ。其ノ風貌ノ如何ヲ問ハズ之ヲ西南ノ地ニ置ケバ客ノ争フテ之ヲ買フハ、深ク怪ムニ足ラズ。

白河以北奥州ノ地、今分レテ七国トナル。沃野連綿山川索鬱〔さくうつ〕安〔いづく〕ンゾ其ノ深山大沢中龍蛇ヲ生ジテ人心ヲ籠絡〔ろうらく〕スルコト、今日西南土偶ノ世人ニ於ルヨリ、猶ホ甚キモノアルヲ知ランヤ。足下ニ悲ム可キノ泣キヲ泣テ、喜ブベキノ泣キヲ泣カズ。其ノ一方ニ偏センヨリ両〔ふた〕ツナガラ之ヲ泣カザルニ如〔し〕カズ」。

泣者曰ク「善シ」ト。即チ其ノ泣キヲ収メテ、又タ大ニ呼ンデ曰ク「白河以北一山百文」。

なお、この「白河以北一山百文」の侮蔑的な慣用語は、さきの戊辰戦乱で惨敗して以来、東北全体に向けて、傲慢不遜な暴言として浴びせかけられてきたもので、東北人の骨身に徹していたものであります。これが文字化されて今に残っているものの中に、河野広中〔こうのひろなか〕が、明治8年8月、福島県石川町に創設した、東北最初の民権政社石陽社〔せきようしゃ〕⁽¹¹⁾の結成趣意書があります。その中に『東北は一山百文に過ぎずとまで軽蔑せられ……』とあるのがそれでありました。また、明治15年7月、仙台で刊行された番付類の「対物宮城の最〔もつとも〕」⁽¹²⁾の中に、『最も雪〔そそ〕キ度〔たき〕物 旧藩戊辰ノ失敗 一山百文ノ汚名』とあるのもその一つであります。そのほか、明治30年1月11日、新派の俳句団体として誕生した「奥州百文会」⁽¹³⁾の会名、その6日後に創刊された「河北新報」⁽¹⁴⁾の題号も、その決定は、「白河以北一山百文」の屈辱に痛憤反撓したところから発したものであります。

注(1) はらたかし。俗に「はらけい」と呼ぶ。安政3年〔1856〕盛岡に生れた政治家。井上馨・伊藤博文に認められ、外務次官となり、退官後大阪毎日新聞社長。その後、伊藤博文の政友会組織に参加、逓信大臣、内務大臣を歴任、政友会総裁、首相となった。「平民宰相」として聞こえたが、大正10年東京駅頭で刺殺された。

「原敬」(前田蓮山)に、

「後年原敬は俳句をもてあそび、「一山」と号したが、これは藩閥人が東北を軽視して、「一山百文」(やすく買える)と呼んだ。その「一山」を取ったのである。「逸山」とも称したが、これも「一山」の代え字である。昔ドイツがナポレオンから打ちのめされて悲境におちいていたとき、ルイーゼ女皇の手紙の封印には「涙おさえ難し」(ニヒト、オーネ、トレーネン)と刻んであったというが、原敬が「一山」と号した心境と一脈相通ずるものがないでなかろうか。」

「日本の名門100家」（中嶋繁雄）の、あとがきに、
『戊辰戦争の敗北者である東北諸藩出身者のごときは、薩長人から「白河以北一山百文」といわれた。戊辰戦争で朝敵の汚名をきた南部藩出身の原敬（首相）は、生涯その屈辱を忘れず、死ぬまで華族になることを固辞しつづけたという。「平民宰相」に徹したゆえんだが、一つには心にきざまれた朝敵の汚名が、その頑張な辞退となってあらわれている。』とある。

注(2) P. 47 の注(1)参照。

注(3) 「近事評論解題」（石井研堂。「明治文化全集」第5巻雑誌編、明治文化研究会編、昭和3年刊）に、『明治八年頃から一四、五年頃迄の間に、四六判唐紙〔もと中国で製し、わが国に輸入した紙。楮〔こうぞ〕皮と嫩竹〔わかだけ〕との繊維に苛性ソーダを交ぜて漉〔す〕いたもので、表面は粗剛、質はもろく裂けやすい。墨汁の吸収がよいため書画用とし、また表装の裏付にも用いる。国産の和唐紙をも唐紙という。〕摺綴本体の雑誌が沢山出て、一の時代相を鮮明にしている。「近事評論」も亦、その間に発行された代表的政論雑誌である。当時「評論新聞」あり、激越の政論を掲げ、毎月のやうに記者編輯者が処罰を吃〔きつ〕し、九年七月終に其の発行を禁止された。』

「近事評論」は「評論新聞」の発行禁止の前月、明治9年6月3日の創刊で、毎土曜日発兌〔はつだ発行〕、四六判唐紙毎冊十張〔ちょう。丁。1枚を二つ折りにし、表裏2ページを1丁という。〕内外、[×]纂〔[○]蹇〕[○]諤〔けんがく。直言してはばからないこと〕の論を掲げて時事を評論し、其声価は、日刊新聞と相伍〔あいご〕して遜色〔そんしょく〕無かった。内務省図書局年報に曰ふ「近事評論」明治十一年発売高八万六千四百部、十二年度七万九千四百十六部と蓋〔けだ〕し雑誌中の上位を占むるものである。十三年十一月八日、内閣讒毀〔ざんき〕の科〔とが〕で、編輯長井上敬次郎が、禁獄二ケ年罰金五百円の重刑にも遭うたが、政論雑誌としては、其生命最も長く、明治一六年五月、第四三六号を以て廃刊した。』とある。

「近事評論」創刊号の出版事項は次の通りである。

『定価四銭

世話人 横瀬文彦

総編輯長 高羽光則

本局 東京館屋町十二番地

共同社

土曜発行 』

注(3) 「漂風子」とは、「近事評論」を発行した「共同社」の主宰者で、政治評論家林正明のペンネームといわれる。林正明の伝には不明な部分が多い。林の生年は不明。旧名は玄助。肥後熊本の軽輩下士、幕末君命により江戸に遊学、慶応義塾に学び、後、欧米に留学した。帰国

後、大蔵省・司法省に出仕、明治6年正院〔明治4年設置、同10年廃止の最高官庁、今日の内閣に当る〕翻訳〔ほんやく〕局員となる。この時期に、主に欧米政治論の著作や翻訳書を公刊した。翻訳局を辞職し、翌9年「共同社」を結成し、「近事評論」を主宰発行した。熊本実学党（洋学派）の同志だった徳富猪一郎（蘇峰）によれば、留学中に英国の「サタデー・レビュー」誌に刺激されて、この「近事評論」を出したのだという。11年には「扶桑新誌」を発刊した。その後、嚶鳴社〔おうめいしゃ。明治初年の政治結社。沼間守一の創立。西南戦争後、自由民権思想の流行に刺戟されて起った。〕社員・「東洋自由新聞」記者・自由党幹事・九州改進黨幹部として精力的な活動を続け、明治18年歿した。

注(4) どぐう。土製の人形。

注(5) じょうこく。京師〔けいし〕に近い国。近畿地方の国。かみがた。

注(6) 薩摩、長門、肥後、土佐の国々。

注(7) 「敷」は「嚴」に通ずる。

注(8) 鳥の空高く飛ぶさま。

注(9) 草木が青々と盛んに生い茂るさま。

注(10) 巧みにいいくるめて人を自由に操つこと。

注(11) 嘉永2年〔1849〕生れの福島県の政治家。自由民権運動の急先鋒として、福島事件で投獄。後に衆議院議員、農商務大臣となった。大正12年歿。

注(12) P. 601の「206. 「対物宮城の穴」とは」参照。

注(13) 「仙台の文学散歩」（仙台市教育委員会）に、

『新俳句誕生「百文会」

子規が松島を探訪してから、新俳句運動が全国的に起きた。仙台でも第二高校（当時、今の片平丁、東北大の地）の若い人たちを中心にして、明治三〇年（一八九七）奥羽百文会が結成された。＜我等は年若く覚束〔おぼつか〕なき身ながらも、このたび東北の野に打って出で、俳壇新派の拡張をはからんと、紅緑、樵林、古奥の諸子に謀り、第一回の集會を正月十一日仙台市東七番丁の時雨庵に催しぬ。運座の催しあり、約して月一回の集會としぬ。――「新派俳家句集、近藤鬚男著、明治三〇年四海堂判＞ 文中の紅緑は佐藤紅緑（「ああ玉杯に花うけて」の著者、息子、サトウハチロー）であり、樵林はもと二六新聞記者の辻樵林であった。ちょうど佐々醒雪が第二高等学校教授として来任していたので、これを主宰として迎えた。そして、以来、若尾瀾水、大須賀乙字（漢学者筠軒〔いんけん〕の子）など二高生の若さが軸となって百文会が受けつがれ、明治の地方俳壇に力を尽したのである。……「奥羽百文会」の結成される三年前、明治二七年（一八九四）の二高には、高浜虚子と何束田碧梧桐が在学していた。……』

「宮城県百科事典」（河北新報社）に、

『奥羽百文会』

1986年（明治29）、佐藤紅緑が「東北日報」記者として来任するとともに、日本派俳句運動の胎動があった。翌年1月、河北新報創刊に際し、紅緑は同紙に移る。「ほととぎす」が松山で創刊。同月紅緑・近藤泥牛（鬚男）・辻樵林らで第一回奥羽百文会を開催する（東七番丁時雨庵）。京都俳友満月会に続く日本派の結社である。9月若生瀾水の第二高等学校予科への転入を迎え紅緑の木魚庵（東二番丁）で百文会を開く（第8回）。佐々醒雪、戸沢古鐸らも参加。その後会は断続的に催されたが、31年に入ると瀾水の入院、紅緑の上京（10月）により衰微する。1899年（明治32）4月、醒雪は山口に去り、吉岡向陽が来仙し、百文会に関係するが、俳風を異にしてリーダーとはなり得なかった。他方古鐸らが病氣回復後の瀾水を推して主宰とした。10月石井露月を迎え百文会を開いた前後から、三淵大魚（忠彦）天野杉雨、相沢暁村ら二高関係、矢田挿雲、本野虚静ら部外者も加わり、1900年（明治33）春から夏へかけて寒川胤骨・紅緑らが来仙し、会員40人を超え最盛期に達した。河北新報や「尚志会雑誌」〔二高同窓会尚志会機関誌〕が発表機関であった。同年7月、瀾水卒業後、三淵大魚が後を継いだ。だがその後の百文会の動静は明らかでない。ただ大須賀乙字（績）、佐藤澱橋（清）、広田寒山（康）、上山草人らによって継承されたことは知られる。二高生が主体で断続もあったが、特起すべき文学運動であった。』とある。

「河北新報の生誕前後」（河北新報社）に、

『「奥羽百文会」で仙台に文芸の花開く

このころ多くの文人墨客が仙台に遊んでいるが、なかでも島崎藤村は二十九年九月四日に、東北学院の教師として仙台に着任し、心の落ち着きと安らぎを得て、創作活動に励んでいる。「若菜集」のなかの大部分の作は、止宿先である名掛丁の三浦屋の静かな八畳間で生まれたものである。また同じ九月、高山樗牛と佐々醒雪の二人が、第二高等学校の教師として、一緒に着任している。また明治三十年一月十日、仙台で「奥羽百文会」が誕生している。これは二十六年以来、東京の「日本」新聞（陸羯南〔くがかつなん〕主宰）紙上によって活発に展開されてきた正岡子規の俳句革新運動に呼応して結成された新派の俳句会である。「奥羽百文会」の「百文」は「白河以北・一山百文」から採ったものである。』とある。

注(14) 「河北新報の生誕前後」（河北新報社）に、

『河北創刊号の第四面に改進黨幹部の首藤陸三が「祝文」を寄せ、名付けて河北新報と称す。けだし頼襄（山陽）氏のいわゆる「河北渾身独眼竜」の句意に出でたり……

東北は長い間、未開野蛮の地とされてきた。古い東北の歴史は、差別支配とそのための攻略の記述によって彩られている。東北は「化外の民」の世界、飢餓と貧困と無秩序の社会として描かれている。中央史家たちの征服史観によって、東北人は多大の屈辱と犠牲を強いられてきた。それが明治・戊辰戦争によって、さらに増幅され、「白河以北・一山百文」の露骨

な蔑称となっていたのである。幕末文久三年〔1863〕に生を受け、長ずるに従って東北の苦難を身をもって知った一力健次郎によれば、西南の閩族官僚は東北を「第二の蝦夷民族」の地位におとしめるものである。この屈辱をはね返し、河北の地を政治的、経済的、文化的に自立・発展させ、河北の復権を図らなくてはならない—そうした抵抗と奮起の精神が「河北」の二字に凝縮されているのである。……

一力健次郎が、「河北」の言葉を重用したのは、単なる地理的範囲を指すものでなく、「一山百文」決起の歴史的寓意を含めたものである。しかも、健次郎はその後、河北の営業区域を利根川以北の北部日本に拡大し、これに北海道を含める積極策に出た。』とある。

「河北新報」の題号の「河北」の出典となった頼山陽の漢詩には、次の二つがある。

1. 文政年間〔1818～1829〕作、「多賀城瓦研歌」〔39句につき前後略〕

『河北終帰獨眼龍』

2. 天保元年〔1830〕作

『横槩英風獨此公 肉生脾裏斂軍鋒

中原若未収雲雨 河北渾帰獨眼龍』

獨眼龍とは中国唐の隻眼の英雄李克用〔856～908〕。頼山陽はこれらの詩中で、わが国の伊達政宗を李克用に擬した。李克用についてはP. 331の注(5)参照。

資料 近事評論 148号（共同社）

92. 「きびちょ」は仙台方言か

問 「きびちょ」は、仙台の方言か。

答 「きびちょ」の原語は、中国語の「急焼」〔jishao〕の福建音であるとされています。これが、江戸時代わが国に入ってきた外来語の一つで、本来の用途とは異なる煎茶器として使われてきたものであります。「大言海」（大槻文彦）に『〔急焼ノ支那福建音ナリト云フ〕きふす（急須）ニ同ジ』、⁽¹⁾「仙台方言考」（真山青果）に『○きびちょ きふす 煎茶器の急須をいふ。キビショの訛れるなり。⁽²⁾芸苑日渉に「今人呼小茶瓶急須焼、即急須也。須音蘇、国音呼急蘇、猶云急備焼、蓋唐音之転訛耳』とあります。これを「きびしょ」、「きびしょう」と呼ぶ地方もあります。所詮、「きびちょ」は、外来語の一つであって、「きびしょ」といい、「きびしょう」といい、「きびちょ」といったところで、そのどれもが原音を正確に表現しているものといえません。「きびしょ」や「きびしょう」が標準語で、「きびちょ」が仙台方言であるときめつける根拠はありません。外来語の日本音はもともと